既存ストックを活用したこれからの公共事業のあり方について

福島県土木企画課　　正会員　松本英夫
福島県県中建設事務所道路課　　阿部俊弘
福島県県中建設事務所道路課　○國分彰成

1．はじめに

福島県では、多様な交流ネットワークの形成を目指し政策に取り組んでいるが、道路改良工事において、交通量が少なく費用対効果が小さい、景観や歴史的資産を保護する必要があるなど、規格改良を実施できない路線が数多くある。

一方、そのような地域から整備を求める声は数多く、生活基盤としての道路整備の必要性は高まっている。

今回は、岩瀬郡天栄村から郡山市湖南町に至る県道羽鳥福良線の整備事例をもとに、地域とかかわりながら、既存ストックを活用した道路整備を通じ、今後の公共事業のあり方を提案する。

2．こみち

県道羽鳥福良線は、昔から白河藩と会津藩を結ぶ街道として利用され、白河街道（現国道 294 号）が整備された後は、この街道を補完する「こみち」として位置づけられた。白河藩側の大平・羽鳥地方と会津藩側の福良・赤津地方間の人や物の流れは、白河街道を利用するよりも近いという利点上、両地方の往来は絶えなかった。

白河街道のこみちであった街道は、県道羽鳥福良線と名前を変えた後も、大型化、大量化が進む物流が国道 294 号に依存している状況にあって、大規模な改良は行われなかった。

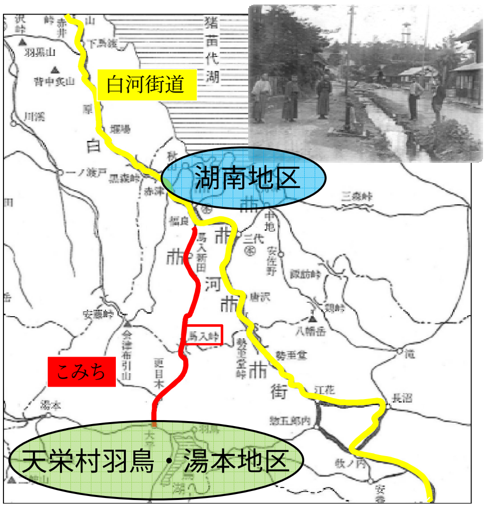

図-1　白河街道とこみち

白河街道と対照的な経過をたどり開発を免れた、こみちである県道羽鳥福良線は、逆に街道であったことを示す旧跡や自然景観といった「独自の魅力」が失われておらず、かつて先人たちが見たであろう風景をそのまま体感できる貴重な空間が現存している。

3．こみちの交流

(1)交流会の開催

こみちで結ばれる天栄村羽鳥地区と郡山市湖南地区は、羽鳥湖高原や猪苗代湖、布引高原など、さまざまな観光地が点在し、四季を通じて毎年多数の観光客が訪れている。

また、両地区には地域活動団体が多数存在し、活発な活動を実施している。

この、こみちでつながる両地区を結びつけ、県道を通じた地域の活性化を図ろうと、平成 20 年 3 月にはじめて地域交流会を実施した。交流会では、地域の主体性を重視し、我々は側面からその取り組みを支援するマネジメントを行った。その結果、お互いの地区の昔からの繋がりを再発見するなど活発な意見が交され、さらにこみちの存在が欠かせないことが分かってきた。

写真-1　交流会での現地調査

(2)交流会での活動

会を重ねる中で、こみちの魅力を地域外の人にも知ってもらいたいという気運が高まり、さらには、自分たちのデザインした看板で地域資源を案内する発想が持ち上がった。

図-2 検討会でデザインした看板の案

キーワード　既存ストックの活用　地域交流
連絡先　県中建設事務所　郡山市麓山 1-1-1　　TEL024-935-1430

そこで、交流会の下部組織として、「こみち検討委員会」を数名で組織し、案内板の設置位置やデザイン、キャッチコピー等を検討していった。

検討委員会のメンバーは、郵便局長、公民館職員、元学校（美術）の先生、バス会社営業所長など様々な職種の方からなり、幾度も検討を重ねた結果、平成20年度にデザインを決定し、平成21年度に案内板を5箇所設置した。

そのほか、私有地に遊歩道を作ったり、草刈りをする活動が自発的に始まった。

活動には、交流会のメンバーの他、地域の有志、そして行政側もボランティアとして参加し、その数は約30名に達した。

写真-2　活動に集まった有志

(3)こみちの整備

こみちである県道羽鳥福良線は、通行量が 560 台/日の一般県道であり、延長約15km区間のうち約10kmが幅員5.5m未満の未改良区間、約3kmが砂利道となっている。

また、山間部の道路であるため、線形も悪く、勾配も急である。一方、近年のカーナビゲーションの普及と相まって、観光地である羽鳥湖周辺と布引山、猪苗代湖周辺を直線で結ぶことから、道路の利用が急激に多くなってきており、地域から砂利道解消と改良を望む声が高くなってきていた。

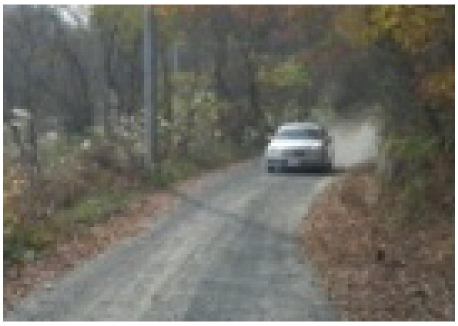

写真-3　羽鳥福良線の現況

県道の周辺には、様々な地域資源が点在し、地域の宝となっていること、両地域の活動が非常に活発であることから、地域住民との協働による道路整備を計画することとした。

計画を策定するにあたり、地域の代表者のリーダーシップのもと、地域が真に望むものはなにかを話し合い、その結果、規格に沿った改良は望まず、旧跡や自然景観といった、ここにしかない風景を守ることを第一に計画を立てることとなった。

整備方針として、道路敷として未利用であった空地をすれ違いのできる待避所として整備、景観に配慮した防護柵を設置するなど、既存のストックである現道を最大限活用し機能の充実を図っていくこととした。

平成21年度に待避所を19箇所、防護柵を600m施工し、砂利道の解消を実施した。また、名所である菅滝を望む視点場の整備を行い、来訪者の増加が今後期待されている。

写真-4　待避所の整備状況

写真-5　名所菅滝

4. おわりに

道路は地域文化の創出や、人々の交流を促進するなど、地域文化醸成の一翼を担ってきた。

人口減少社会の到来にあって、これからの公共事業のあり方について考えると、地域ごとに異なる価値を認識し、最も合理的な選択をどうしていくかということに注力する必要がある。

また、地域で意欲のある人や団体、ＮＰＯ等の知恵と力を結集して、その地域独自のビジョンを作り、利用目的を明確にしたうえで、地域に真に必要なものをともに考え、行政側はそれを支援し、分かりやすく社会へ説明する能力が求められる。

地域と向き合い、話し合う過程の中で、新たな魅力が発見され、地域住民の中でも固有の魅力や歴史的資産を大事にしていこうという気運が高まっていく。そして訪れた人に喜ばれ、喜ばれたことが地域の誇りにつながり、それが地域の再生にもつながっていくものだと考える。